
夏祭り ～成田隼人《なりたはやと》編～

黑夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭り ～成田隼人編～
なりたはやく

【Nコード】

N0101W

【作者名】

黑夜叉

【あらすじ】

俺たちに翼はないの短編小説第二段！！今回の主役は隼人と鳴です。初めての方でも楽しんで頂けたら光栄です。

（前書き）

この小説は「俺たちに翼はない」symphony」の一万PV記念小説です。そちらも読んでいただけたら嬉しいです。

携帯のディスプレイ画面に浮かぶ時刻を見て思わず舌打ちをする。
あそこで昼寝をしたのが間違いだっただか。

つか、なんで昨日に限ってあんなに仕事がついんだよ。

おかげで、体の疲れが全く取れなかったじゃねえか。

そんなことを心の中で毒づいていると目的の場所が目の前に見えてきた。

そこにはやはり約束した人物が待っていた。

あー、くそつ。また待たせちまった。

「悪い鳴。少し遅れた」

「いいですよ、それくらい」

予定の時刻に遅れたことを怒ってくるかと思っていたがどうやらその心配は杞憂に終わったようだ。

鳴はニコニコと俺の方を向いていた。

鳴の服装はいつもとは違い浴衣姿だった。

紫地にピンクの薔薇と桜の模様が描かれていて、帯は赤色。

髪型は祭りと言うことでか、サイドポニーではなく後ろで結い上げていた。

そういや、普段はほとんど制服姿しか見ていないな。

といっても、こいつの勝手な解釈で俺が制服フェチだということになってからだけなんだが。

いつだれが制服フェチだって言った。認めてねーよ。

そんなことを思っている間、鳴の視線はずっと俺に留まったままだった。

あー………、感想言えってことか。

「鳴。浴衣姿似合ってるぞ」

「そうですかー。いやー喜んでいただけてよかったですー。やつぱりこれも鳴さんの妖艶な色香漂う魅力的な体のおかげですねー」

「いや、小学生みてえで」

コイツの身長は見たところ150cmくらい。

しかも、胸がそれほどあるというわけでもない。

そのせいで、浴衣を着ても幼い感じが体全体から自然とあふれ出ている。

これを見て「妖艶な女だ」と言えるやつはできるだけ早く眼科に行くことを勧める。

ヒュッー

「うおっ!？」

その答えを聞いて、鳴が目つぶしをしてきた。

反射的に体をのけぞらせて攻撃を回避したからよかったものの、当たっていたら失明していたに違いない。

「避けないでくださいよ。その汚れた二つの玉を取り除いて綺麗にしてくださいから」

「いや、これ取られたらお前のせつかくの浴衣姿見えないじゃん」

ピタリと攻撃が止む。

今が言い直しのチャンスの時だ。

「さっきのは冗談だ。あー、正直ものすごくかわいいと思う」

かわいいと思ったのは本当だ。

だつてそうだろ？

ふつう彼女がかわいくないなんて言うやつはいねえだろ。

期待通りの答えが聞けたのか鳴の顔は、見る見るうちに満足そうな顔になっていった。

「ふへへー」

「口閉じろ口。よだれ垂れんぞ」

~~~~~

「わあー、すごい賑わいですねー！」

「まあ、この周辺じゃ大きい方だからな」

柳原のビル街から少し離れたところにあるここ日光神社は昔からある由緒正しい神社だ。

確か……江戸くらいからだっけ、いやもつと昔だったか？

いや、ンなことどうでもいいか。

とりあえず、歴史があつてデカイってことが伝わりゃいい。

「あつ、金魚すくいだー！」

突然、隣から声が上がった。

金魚すくいって……マジかよ。

いい歳したやつがやるようなものではない気がするんだが。

「やるのか？」

「そうですねー、家じゃ隼人さんがいないとき以外は基本一人なので飼うのも悪くないですねー」

「いいんじゃない。似合ってると思うぞ」

子供っぽい感じが。

「つまり、私が黄金が似合うクレオパトラのようなスタイル抜群な大人な女性だということですね！ついに鳴さんの魅力に気が付く日がきましたか！くはー！」

「誰がクレオパトラだ、誰が。つかお前、ビール飲みほした後のおっさんか」

なぜコイツは「似合ってる」と言ったら自分とは縁がないような容姿を思い浮かべるんだ？

全く不思議だ。

本人がいくら言おうと勝手だが、間違いなく鳴に大人な女性、もしくはそれに関連する言葉は似合わない。

「おっさんってなんですか、もー！それが乙女に対してかける言葉ですかー！」

「あのさー、大人な女性と乙女って相反するような気がするんだけど」

いやな、乙女って若い女の子に使う単語だろ？

それだと大人な女性という言葉と矛盾しちまうわけよ。

「あー、たこ焼き屋さんだー」

「おい。話そらすな。つか、金魚はどうしたんだ」

「誰かさんのせいでやる気が失せたんですよ！」

「その美人でスタイルの良いお姉ちゃん！いっちょ、やっていないかい？」

「あら？このおじさん、よくわかっていらっしゃるじゃーございませ

んか。喜んでやらせてもらいますわ」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鳴は金魚すくいのおっさんのお世辞を聞いて途端にやる気を見せ始めた。

コイツ将来大丈夫か？

簡単にセールスと詐欺のかっこうの餌食になってそうだ。

鳴はお金を払いポイをもらうと腕をまくり、「ふんす！」とどっかのアニメの天然キャラがやりそうな気合の入れ方をした。

たかが金魚すくいでもここまで真剣になる必要があるのか？

俺は少し呆れながら鳴の後ろに移動した。

鳴はポイ全体を水にぬらすと金魚に近づけていった。

そして、一呼吸置くと目をカッと見開き一気にすくいかかった。

その一連の流れは、テレビで時々見る熟練者を連想させるものだった。

金魚は獲れてなかったが。

「あー、破れちゃったー……………」

「残念だったな」

「隼人さんもやってみて下さいよ」

「ハードボイルドな男はこんなことしねえんだよ」

「まあまあ、そんなことを言わずに」

そう言つて鳴は俺を無理やり座らせた。

「つたく、どうやってやりやあいんだよ。」

俺は今まで金魚すくいなんてしたことねえぞ。

「おし！そんじゃあ彼氏さんもポイ一つな！彼女のかたきとれよ！」

野太い声でそう言つと、おっさんはポイを渡してきた。

「……………ここまで来たらもう腹をくくるしかねえか。」

俺は腕をまくつて一つ気合を入れると金魚をすくいにかかった。

~~~~~

「……………」

「ま、まあ、隼人さん元気出して下さいよ」

結果、一回目失敗して何度も挑戦していたらいつのまにか千円が消えていた。

しかも、一匹も獲れなかった。

くそっ！意地になったのが間違いだった！

「ほら、お二人さん。オマケだよ」

自分の過ちを責めていると、突然金魚の入った袋が目の前に現れた。

「「へ？」」

予想外の出来事に俺と鳴は情けない声をあげてしまった。

彼女の前で何してくれてんだ。

ぶっ殺すぞコノヤロー。

「頂いていいんですか？」

「あたり前さ！こんなにお似合いのカップルはなかなかいねえからな！」

ガハハと豪快に笑う金魚すくいのおっさん。

なんとなくカンジがヒゲ監督に似ているような気がする。

ところで、言われた鳴はと言うと……

「やゝん！そんなストレートに言わないでくださいよ」

恥ずかしそうに体をクネクネさせていた。

~~~~~

「ところでどうします？」

金魚すくいを離れてしばらく歩いていると、鳴が声をかけてきた。

「あん？何が？」

「名前ですよ。この金魚に何かいい名前をつけましょうよ」

「ンじゃあ、金魚で」

「そのままじゃないですか！ダメですよ！私と隼人さんの初めての子供なんですよ！」

「いや、お前腹痛めてねえだろが」

「ついさっき、頭の中でしたから大丈夫ですよー」

「何が大丈夫なんだ。あと、明らか発言が危ねえよ」

そっぴや、コイツ妄想癖だつたか。

「えーと、私と隼人さんの名前から取って……ナ。ト。なん  
てのはどうでしょうか」

「おい、待て。それは明らかパクリだろ。著作権的にイロイロ問題  
あんぞ」

「それならナトーはいかがでしょうか」

「は？納豆？」

「いえ、アルファベットでNATOですよー」

「あー、いいんじゃないの」

テキトーに相槌をしたものの何かが引つ掛かった。

どっかで聞いたような気がするんだが………？

まあ、気のせいだよな。

「じゃあ、そうしますねー。今日からお前の名前は北大西洋条約機  
構ですよー」

「……………」

~~~~~

「そういえば隼人さん、知ってます？」

「あん？何が？」

だいが人が増えてきて祭りも賑わいだしてきたころ、鳴が片手に持った焼きそばを箸でいじりながら尋ねてきた。
もちろんこれは俺が買ってやったやつだ。

「実は隼人さんをまつふえひゅひよふいにひいはんふえひゅへふお」
「食べながら話すな。食べながら」

聞き取りにくいし、汚ねえだろうが。

鳴は口にあるものをゴクン、と飲み込むとまた話し始めた。

「えー、風のうわさで聞いたんですけどー。ここの祭りのピンク色のミニバンにあるミックスベリーを食べると幸せになるそうですよー」

「ンで、そこに行きたいわけか」

「いえー、私はどちらでもいいんですけど隼人さんはどうかなーと思いますして」

「それじゃあパスで」

がしっ！

結構な腕力で袖をつかまれた。

「……なに？」

「本当は行きたいんですよね？」

「いや、俺どつちでもいいし」

「もー！そこは察してくださいよー！」

両手をぶんぶん振り回して頬を膨らませる鳴。
まるで子動物だな。

「いや、わかってたけどさ」

「それなら早く行きましようよ！ほら！レッツゴー！」

そういつて俺の手をつかみ、鳴は元気よくそれがあるらしい方向へ向かっていった。

その足取りは軽かったが、それとは対照的に俺は足に鉛がついてるかのように重かった。

はあ、いきたくねえな。

だってな。ピンク色のミニバンと言ったら絶対え……………

~~~~~

「パルさんだしなあ……………」

「なんだい、そんな露骨に嫌そうな顔して。そんなにあたしに会ったのがいやだったんかい？ええッ？」

この人はこの店「パルクレープ」女店主、パルさん。

本名は……………なんだったつけ。

確か前に聞いたとき鳴のやつが春を売る名前とか言ってたな。

まあ、いい。んなことはどうでもいいことだ。

「ンで、パルさんは何してんの」

「何って見たらわかるだろ。クレープ売ってんだよ。こういつ日こそ稼ぎ時だからねえ」

「へえー、大変ですねー」

「全くだよ。それで、お二人さんはデートかい？」

彼氏のいないクレープ職人は口を横に広げてにたにた笑いながら聞いてきた。

「おい、ドラ。今あんた、失礼なこと考えてなかったかい？」

「い、いや、気のせいだろ。そうだ、パルさん。クレープ2つ頼むわ」

危ねえ。今パルさんの後ろに阿修羅が見えたぞ。

女のカンって怖いーな、おい。

「はいはい。それで、注文はどうすんだい？」

「あ、はい、ミックスベリー二つでお願いします」

「えっ、俺もか？」

「当たり前ですよ」

「あー、悪いな鳴。実はミックスベリーはついさっき売切れちゃったんだよ」

パルさんは申し訳なさそうな顔をして謝った。

だが、俺はそれを見て何か引かなかった。

なんというかそれが儀礼的に思えたのだ。

「そうなんですか……」

もうちょっと早く来ないといけなかったですね、といった声は普段よりも低く、心底残念がっているのが分かった。

「そうそう、ドラ。ちょっとお前さんに話があるんだよ」

「俺に？まさかエージじゃないよな」

アイツは危ねえ仕事しか押し付けてこないからな。  
この前だって、寿命が縮むかと思っただぞ。

「違っつて、あたしがあるんだよ」

「パルさんが？」

「ああ、そうさね。それで、すまないけど鳴。二人きりで話がいから向こうに行つてくれないかい？」

「えー、なんでですかー！はっ！まさか、人には言えないようなことでもするんですかー！？」

「人様の彼氏に手を出すほどあたしは飢えてないよ。ほらあそこのベンチで待つときな。ドラがおこつてくれるつてよ」

「おい、誰も言つてねえよそんなこと」

「ドラさん、ありがとうございますー」

「いや、お前もなんで感謝してんだよ」

「でも、するつもりだったんだろ？」

ぐっ………！

確かにそうだけださあ。

さりげなくやるつてのがハードボイルドつてやつだろ。

~~~~~

「それで、用事つて何なんだ？」

「あんたさあ、クレープつて何頼むつもりだい？」

「何つて………」

明らかにパルさんの目は何かを語っていた。

ここは奮発して一番高いのを二人分買えってことか？
えーと、一番高いやつは……

「そんじゃあ、フルーツミックススペシャル二つで」

「はぁー、やっぱりあんた分かってなかったのか」

「何がだよ。今最近の流行りでもあんのかよ」

「つか、見んな俺の顔をそんな目で。」

何、俺なんか呆れるようなことしたか？

むしろ、少ない所持金を使おうとしたことを褒めるべきだろ。
ぶっ殺すぞコノヤロー。

「そんじゃあ、ヒント出すから当ててみな」

「上等だ」

「鳴が食べたいのはミックスベリー」

「でも、ねえんだろ」

「それじゃあ、このメニューを見て何か思いつかないかい？」

そういうと、グイツと俺の顔にメニューを押し付けてきた。

少し濡れた手からそれをひたたくって、ざっと見回してみる。

思いつかないかって言われても、何が思いつくのか見当もつかない。
ミックスベリーのところは予想通り売り切れになっていた。

なのにヒントはミックスベリーって……ああ、そういうことか。

「わかったかい」

「あたり前だろ。ドラさんの頭なめんじゃねえよ」

「はいはい。そいじゃあ、正解を言ってもらおうかね」

「ああ。ーとーをくれ」

「ほぉー、ドラにしては上出来だねえ」

「なに『コイツこんなことできたんだ』みたいな表情してンだよ。ぶっ殺すぞコノヤロー」

そこでふと気になったことを聞いてみた。

「なあ、パルさん。もしかしてこのミックスベリーって……」

「ああ、ずっと売り切れさ」

「やっぱりか……」

~~~~~

「隼人さん、早かったですねー」

「おう」

パルさんから注文した品を受け取って、ベンチに向かうと鳴は足をブラブラして遊んでいた。

「イチゴでよかったか？」

「はいー。夫が買ってきてくれた者は何でも食べますよー」

そういつて、俺からクレープを受け取るとはむっと噛みついた。  
いや、まだ結婚してねえし。

「んー！おいひー！」

幸せそうな顔をして足をバタバタさせる鳴。  
やっぱり、子どもみたいだ。

「でも、ミックスベリーが食べられなくて残念でしたね」  
「そうだな」

俺は隣に腰をおろし、計画を実行に移すことにした。

「なら、俺が食わしてやるよ」  
「ふえ？それはどうひうー！？」

俺の計画とはつまりこういうこと。  
自分のクレープ（ブルーベリー）を小さくかじり、それを鳴の口に  
持っていくということ。  
いわば、口移しってやつだ。

「い、いひなり何をしゅるんでしゅか！？」

予想以上に顔を真っ赤にして慌てだす鳴。  
ヤバイ。おもしろすぎ。

「だから、食わしてやったんだよ『ミックスベリー』を。俺のはブ  
ルーベリーだったからな」

「へ？・・・あっ！ストロベリーとブルーベリーですか！？」  
「そういうことだ」

「あー、そうだったんですか！。全く気付きませんでした」

まあ、俺もパルさんが言うまでは気付かなかったんだけどな。

「でも、隼人さん。大胆なことするんですね」  
「うるせえ。顔から火が出るくらい恥ずかしかったんだからな」  
「へえー」

「見るな、人の顔ジロジロ見るな。恥ずかしいだろ。ぶつ殺すぞコノヤロー」

その後、鳴の提案により互いに食べ合いさせながらクレープを完食した。

この様子をずっと非リア充の女店主が気持ち悪いほどニヤつきながら見ていたが、とりあえず無視することにした。

~~~~~

現在、俺は鳴の後ろについて少し離れたところにある土手を歩いている。

なにやら、どうしても俺と行きたいところがあるとのこと。一体何があるんだ？

「あ、隼人さん、ここです」

鳴は急に立ち止まり、俺に座るよう促してきた。

「おい、鳴。何かあるのか？」

「待ってたら分かりますよ」

そういつて、小悪魔のように笑った。

しばらく草の上に座っていると、ちらほら人が見え始めた。いったい何なんだ？

そんなことを思った刹那、ドーンとでっかい爆発音が夜空に響き渡った。

思わず驚いて空を見上げると、あまたの赤い筋が消えて行く途中だ

った。

ああ、花火か。

「ここ、穴場なんですよ。この土手ではこのあたりだけがきれいに
見えるみたいですよ」

エヘンと。無い胸を張る鳴。

ほんと、まるで（以下省略）。

「本当にきれいですねー！」

「そうだな」

鳴は目をキラキラ輝かせながら夏の風物詩を見ていた。

知ってたか？花火って御先祖様を供養するためにやるんだぞ。

けっして、恋人と見るためにあるんじゃないからな。

といっても、俺もこうやって見ているわけだが。

どれくらい時間が経っただろうか。

もうかなりの数の花火を見て、だいぶ目がチカチカしてきた。

それに、だいぶ体が疲れてもきた。

とりあえず身体を伸ばすか。

「隼人さん。来年も来ましようね」

ふいに鳴の声が花火の音にまぎれて耳に入ってきた。

顔を向けた先にあった花火の放つ光に照らされたその微笑みは、お
もわず見入ってしまうほど綺麗だった。

来年も、か。

今まで明日なんてことを考えたこともなかった。

一寸先は闇。

それが俺にとって一番ふさわしい言葉だったから。

だが、鳴はそんな俺の一寸先を闇から光に変えてくれた。

今みたいにこれからのことを考えられるのは全部コイツのおかげだ。俺はフツと笑みを浮かべ、花火に目をやった。

玉が何度も打ち上げられている様子から、どうやらもうクライマックスが近いようだ。

「何言ってるんだよ」

「え？」

「これからもずっと、だろ」

その時、今日一番の花火が夜空に浮かんた。

「胸が高鳴るー！」

「おい、作者。花火打ち上がったところで終わっとけよ」

（後書き）

輝「ちゃっかり宣伝してるな」

作「いやー、それほどでも」

輝「褒めてねえよ」

隼「つーか、長かったな。一ヶ月くらいかかっただろう」

作「いや、リアルがいろいろ大変で……。現状、崖っぷち」

鳴「大変ですねー」

作「ほんとに。でも、頑張るしかないよ」

隼「そうだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0101w/>

夏祭り ～成田隼人《なりたはやと》編～

2011年10月7日15時03分発行